



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外. 京大広報 1984, 8401g: 493-504

ISSUE DATE:

1984-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209415>

RIGHT:

# 京大広報

号 外

京都大学広報委員会

## 附属図書館新営特集



### 目 次

新図書館の開館を祝って

総長 沢田敏男…… 494

新図書館の開館にあたって

附属図書館長 高村仁一…… 495

新しい図書館像

—機能面からみた整備の概要—…… 496

新図書館概要…… 500

新図書館平面図…… 501



## 新図書館の開館を祝って

総長 沢田 敏男

待望の新しい図書館が、昨年10月に竣工し、新学年のはじまりとともに、いよいよ開館の運びとなったことは、本学にとってまことに喜ばしいことであります。

情報化時代といわれる昨今、学術情報量も飛躍的に増大し、大学図書館をとりまく環境は大きく変貌しています。また、情報資料の選択・収集、図書館利用のあり方など、図書館業務そのもののあり方も大きく変りつつあると思います。このような時代の流れの中で、本学が新しい時代に適応し得る図書館を建設し、その内容の充実を期して開館を迎えることは、まことに意義深いものとがあると存じます。

このたびの建築により、図書館の規模は約3倍となり、これまでにない施設・設備の拡充をみたのでありますが、学生諸君の学習と教養の場が、よりよい環境の下で提供されるとともに、研究者のさまざまな情報要求に適切に応えていただき、図書館が真に本学の教育・研究を活性化する重要な機関として、全学の期待に応えることが何よりも重要であります。図書館に課せられているさまざまな問題は、大学における教育・研究の進展に深くかかわる問題であり、それだけに国際的な広がりにおいて考えるべき問題をも有しています。



図書館の果すべき役割は、ますます重大であります。

幸い図書館では、すでに新館の運営と機能の一新を重要課題として、新たな施策を着々実施に移されようとしていることは、力強い限りであります。館員諸氏が意欲に満ちた図書館づくりを目指し、斬新な活動を展開されるよう期待します。

今後、この新しい図書館を教育・研究のための基本施設として、全学的なバックアップによって存分に生かすことにより、伝統ある本学の教育・研究の一層の進展に寄与されることを切望します。

開館にあたり、京都大学及び京都大学附属図書館のますますの発展を祈念するとともに、新しい図書館の建設に多年にわたって御尽力賜わり、また、図書館活動の基礎づくりに参画された各位に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

(昭和59年3月21日開館記念式における  
総長挨拶の要旨)



旧附属図書館正面玄関銘板 (第十三代総長 鳥養 利三郎博士書)



## 新図書館の開館にあたって

附属図書館長 高村 仁一

京都大学の長い間の夢の一つが、美しい装いと豊かな機能をそなえた図書館として、いよいよ開館の運びとなりました。まことにご同慶にたえません。読みたい本がほしいと思うときに手に入り、希望の文献が手際よく検索でき、書庫内で自由に拾い読みして思わぬ本や文章と出会い、妨げのない環境で読書と思索にふけり、また分野を越えた学問の交流の場が提供される、大学人のこんな夢を満たせる図書館でありたいとの希<sup>ねが</sup>いが、新しい図書館にはこめられております。

本学が新しい図書館の建設を目指すようになったのは、今から10年もまえの林 良平前館長時代のことであります。当時、すでに建物の老朽化がすすみ、また、面積不足や機能的な面で、図書館活動を拡大していくことが極めて困難な状況になりつつありました。このような状態を打開するため、建物の増築ないしは新営によって、図書館運営の近代化をはかることが緊急の課題となっていました。

新館の実現までには、種々の曲折がありました。関係各位のご尽力とご支援により、昭和56年度の国立学校施設整備事業として、京都大学附属図書館の新営が、文部省によって認められるに至りました。新館は、昭和56年12月に着工以来、約2年の歳月と27億円の巨費を投じて、昭和58年10月に竣工いたしました。

新館の延面積は、旧館の約3倍(14,000㎡)であり、開架図書室、参考図書室、雑誌閲覧室などの充実はもとより、これまでになかった研究個室、共同研究室、教官談話室及びAVホールなど各種の施設・設備が新設されました。この恵まれた環境のもとで、何よりも大切なことは、図書館が利用しやすく、親しみやすい、自由な雰囲気の漂う思索の場となるよう、具体的な運営についてさまざまな工夫と新しい施策を講じなければならないことであります。とくに附属図書館にとっては、五十有余の図書館及び図書室からなる全学図書館システムの中央館として、ハーバード方式とも呼ばれる《調整された分散方式》を、どのように機能させていくかが重要な課題であります。

附属図書館は、これまで主として学生を中心とした学習・調査活動を支援する学習図書館として



の役割を果たしてまいりました。この役割は、ますます発展させなければなりません。今後は、研究図書館、保存図書館及び総合図書館としての機能の充実にも積極的に取り組んでまいります。研究図書館機能としては、例えば、全学的な収書・収納計画にもとづく高額参考図書の集中配置、バックナンバーセンターの設置、工学部の協力を得て実施される化学系新着雑誌の集中配置、その他文献資料の提供業務やテレックスによる研究情報の交流などがあります。このような研究図書館としての機能は、今後の京都大学附属図書館を特徴づけるものになると存じます。さらに保存図書館機能としては、105万冊の収蔵力をもつ書庫の整備とバックナンバーセンターの効率的な運用並びに書庫内の自由閲覧など、従来の保存図書館の概念からの脱皮をはかるとともに、総合図書館機能としては、部局図書館(室)の独自性を尊重しつつ、全学的な有機的連繫を一層緊密に保ち、情報処理センター的な機能を整備すること及び地域センターとしての役割をふまえ、各種の施設・設備を利用した図書館活動の総合化をはかっていきたいと存じます。

附属図書館は、学術情報と文献資料の提供を通じて、教育・研究活動を支援する機構であります。私どもは、図書館を「支援機構」とであると自ら明確に規定することにより、その任務を深く認識し、積極的な役割を果たしてまいります。

新しい図書館の開館を迎えて、この図書館を学生諸君並びに教職員の方々に十分に活用していただき、伝統を誇る京都大学のアカデミズムが一層の光彩を放つのに役立ちますよう、鮮明な図書館像の確立をめざして努力いたします所存であります。

終りに、新図書館の建設と整備に心を砕いていただいた関係各位に深甚の謝意を表します。

(昭和59年3月21日開館記念式における  
附属図書館長式辞の要旨)

## 新 し い 図 書 館 像

## —機能面からみた整備の概要—

京都大学における教育・研究活動を支援する附属図書館が、全学五十余の図書館及び図書室からなる図書館システムの中央館として、どのように機能し運営されるべきであろうか。このことは附属図書館の基本的な課題である。

わけても、このたびの新館建設という画期的な事業によって、各種の施設・設備が飛躍的に拡充・整備されたことにより、全学の新しい図書館への関心と期待はまことに大きい。附属図書館がこの期待に応えるには、この際これまでの図書館業務全般の見直しを行い、さまざまな工夫と施策によって活発な図書館活動を展開しなければならない。

以下このような観点から、新しい図書館がその果たすべき役割・機能の面で、具体的にどのような改善充実をはかろうとしているか、その概略を述べることにする。

## I 図書館資料の整備

附属図書館は、学術情報と文献資料の提供を通じて、利用者の学習・調査・研究活動を支援することを任務としている。したがって、あらゆる分野の利用者のために、図書その他の資料の充実をはかり、利用者の多様な情報入手の要求に応えていくことが基本的に重要である。このことから次の点について改善に努める。

## 1. 学習図書の充実

これまでの附属図書館は、主として学生を中心とした学習・調査活動を支援する図書館としての役割を果たしてきた。新館では、開架図書・閲覧座席がいずれも倍増し、読書環境も改善されたが、この学習図書館としての機能は、今後もますます拡充されなければならない。

このため附属図書館では、新刊書を中心に人文・社会科学、自然科学の全分野にわたる基本図書並びに教養に関する図

書の収書に努め、質・量ともに充実した学習資料センター館としての機能の充実をはかることにし、調和のとれた蔵書構成を目的として、図書館業務の機械化によってその利用実態を把握することに務め、これを選書にフィードバックする。また、これまでも実施してきた「学生希望図書購入制度」を一層活用し、利用者の要望に迅速に応えていきたい。

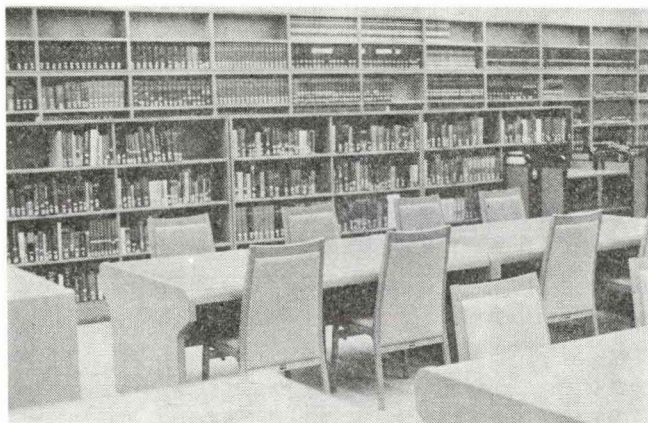
## 2. 研究資料の充実

従来の附属図書館では、研究図書館としての機能を十分に発揮していなかった。これは部局図書館（室）が専らその機能を果たし、その調整と補完の役割を担っていたことにもよるが、新館では、研究・調査活動の援助を重視し、例えば、参考図書室（1F）、雑誌閲覧室（1F）、特殊資料室（3F）の整備をはじめ、「京都大学バックナンバーセンター」（B2）を設置するなど、研究資料を全学的な利用に供するための施策をすすめている。以下はその概略である。

## (1) 高額参考図書の整備

図書館の重要な機能の一つに、所在情報、書誌情報等を提供する参考調査機能がある。新館1階の参考図書室には、25,000冊（旧館では8,000冊）を排架し、56席の閲覧座席を用意している。

しかも、近年における書誌・目録・抄録・索引



参 考 図 書 室 （1階）



など二次資料等の高額化によって、部局図書館(室)では、その収集、維持が困難になっている状況にかんがみ、例えば *Chemical Abstracts Collective Index* や国際連合、国際機関、主要国統計資料などの高額参考図書を、附属図書館で体系的継続的に収書し、広く研究者の利用に供するとともに、オンライン情報検索機能の強化をはかることも考えている。

## (2) 学術雑誌等の整備

雑誌閲覧室(1F)には、新着雑誌を中心にこれまで附属図書館が購入してきた内外の学術雑誌、一般雑誌約600タイトルのほか、新たに工学部の協力を得て、工学部化学6教室購入の雑誌及び工学部共通雑誌合わせて約300タイトルを排架し、そのバックナンバーは、地下書庫に収納し、広く学内の研究者の利用に供される。これにより附属図書館が、いわば化学系雑誌のセンター館的な役割を担うこととなる。

## 3. 視聴覚資料の整備

近年、情報媒体の多様化に伴い、図書館資料の範囲が拡大し、例えば、カセットテープやレコードなどの録音資料、ビデオテープ、ビデオディスク、フィルムなどの映像資料の収集も重要になっている。

新館では、AV(audio-visual)ホールを設け、本学教官が行う視聴覚資料による教育・研究活動に供し、また、AVブースは、個人視聴に供することになっている。このため、今後、視聴覚資料及び機器の充実が必要となる。

## II 図書館の利用面における改善

図書館にとって重要なことは、利用者が使いやすく、しかも自由な雰囲気の漂う思索の場となるように環境づくりをすることと、図書館資料への接近、利用を促すための施策を講じることである。このため、次のよ

うな改善が行われる。

## 1. 自動入退館システムの導入

教職員・学生等利用者に図書館利用証(IDカード)を交付し、これによりできるだけ利用部門を開放し、また、IDカードとブックディテクションを組み合わせた入退館チェックシステムにより、利用者は自由に入出入りすることができる。

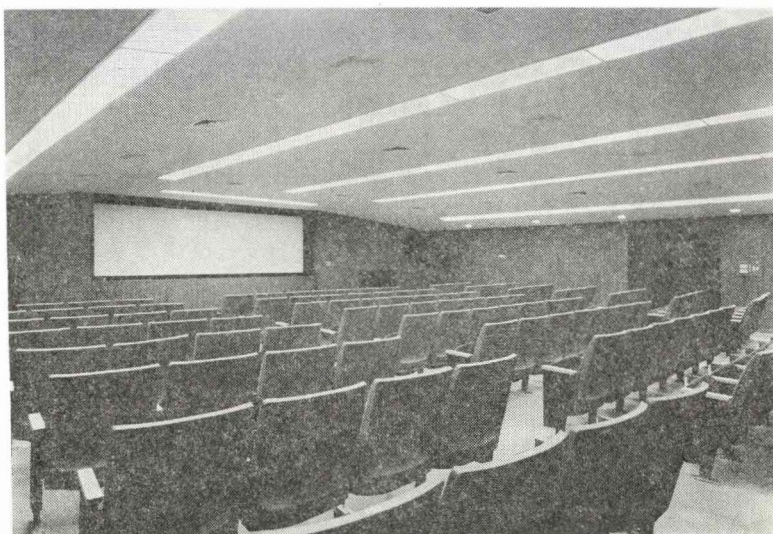
開架図書については、冊数の制限もなく自由に閲覧席で閲覧することができる。

## 2. 自由接架(フリーアクセス)方式の採用

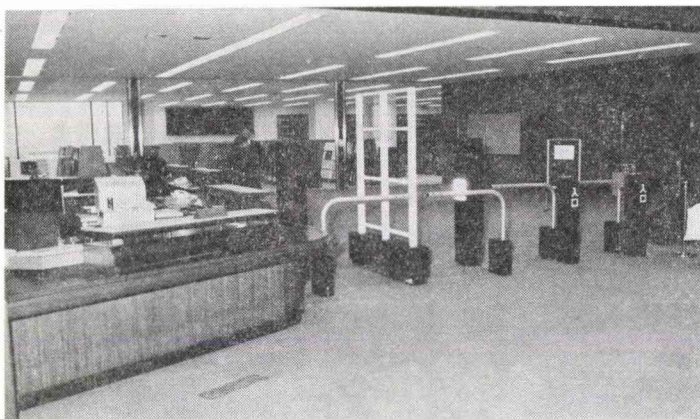
新館では、従来のような書架と閲覧席を分離し、書架に入る際に、そのつど手続を必要とする安全開架方式を改め、開架閲覧室、参考図書室、雑誌閲覧室などでは、書架と閲覧席を隣接させ、利用者が自由に書架に接して採し出した図書を、閲覧席で読むことができる自由接架方式とした。これにより図書検索が容易になり、図書の利用がより便利となる。

## 3. サービス・ポイントの集中化

新館では特に利用部門のスペースを大幅に拡大するとともに、サービス・ポイントの集中化をはかり、メインカウンターで図書の貸出・返却、参考調査、文献複写の依頼等、図書館利用の諸手続がすべて行えるなど、利用しやすい図書館を目指



AV ホール(視聴覚室) (3階)



左よりカウンター、ブックディテクション、  
エントランスホール（1階）

している。

#### 4. 開架図書の充実

自由接架方式を採用することに伴い、次のとおり開架冊数の倍増をはかる。どのような資料を排架するかは重要な問題であり、これまでの利用実態をふまえて検討しているところである。

単行本	70,000冊	（旧館 28,000冊）
参考図書	25,000冊	（ク 8,000冊）
雑誌	900誌	（ク 300誌）

#### 5. 閲覧座席等の増加

建物面積が約3倍に増大したことにより、閲覧関係の各室を整備し、開架閲覧室、自由閲覧室、参考図書室、雑誌閲覧室、貴重図書閲覧室、新聞ラウンジのほか、新たに特殊資料室、研究個室、AVブース、対面朗読室、共同研究室、調査室及びAVホールが設けられ、座席数は約1,000席となる（新図書館概要欄参照）。

#### 6. 夜間開館の業務拡張

これまでの夜間開館では、閲覧業務のみであったが、新館では貸出・返却、入庫検索等利用サービス業務を拡張し、図書館サービスの向上に努める（新図書館概要欄参照）。

#### 7. 書庫内図書の検索

開架閲覧室、参考図書室、雑誌閲覧室等での自由閲覧に加えて、書庫内の図書についても、入庫検索できる利用者の範囲をひろげ、事実上、開架

方式に等しい図書の検索ができるよう改めた。

#### 8. 貸出・返却処理の迅速・簡易化

開架図書の著しい増加と自由接架方式の採用により、利用者及び利用冊数が増大し、閲覧・貸出件数は、従前の数倍になるものと予想される。これに対応するために、閲覧・貸出業務の電算化を実施する。これにより貸出、返却等メインカウンターでの手続は、機械処理されることになり、迅速・簡易化される。

なお、将来は目録検索・情報検索など、図書館業務全般についても機械処理をすすめる予定である。

### Ⅲ 情報入手・提供機能の充実

学術情報のシステム化がすすむなかで、附属図書館は学内における情報センターとしての役割はいうまでもなく、全国的な学術情報システムにおける地域センター館としての役割をも果たすことが要請されている。このため図書館業務の機械化並びに研究情報の提供機能を一層充実しなければならない。

#### 1. 情報処理センター機能の充実

附属図書館は、学内及び近畿北部地区国立大学附属図書館の情報処理センター館としての機能を果たすことになる。このため新館では、図書館業務の機械化処理を推進しようとしている。ただし、当面は閲覧・貸出業務のみとし、本格的な電算化体制は昭和60年1月以降に確立される。

なお、この機械化処理に関連して、将来、現に各部局間で行っている学内文献複写相互協力の援助（精算業務等）をはかることも計画している。

#### 2. 研究情報の交流促進

図書館は、利用者の必要とする情報が刊行物のなかに含まれている限り、いかなる情報であっても提供できるよう努めなければならない。しかし、利用者の必要とする資料を自館の蔵書のなか



から、すべて提供することは困難である。

そこで附属図書館では、学生、研究者の情報要求に対処するため、昭和58年4月、閲覧課に相互協力掛を設置し、単に文献複写サービスにとどまらず図書館間相互協力体制の充実をはかった。

新館では、この掛及び参考掛を中心として、国内はもちろんのこと、諸外国の主要図書館に所蔵されている資料の調査、入手さらに研究者との学術情報の交流、コミュニケーションを支援する。昭和57年9月にテレックスの送受信サービスをはじめたのもその一端である。

#### IV 保存機能の充実

新館には、地下1階に書庫及び貴重書庫、地下2階には電動式集密書架を配置した集密書庫を設置して保存機能にも重点を置いた図書館づくりを目指している。この面での整備状況は次のとおり

である。

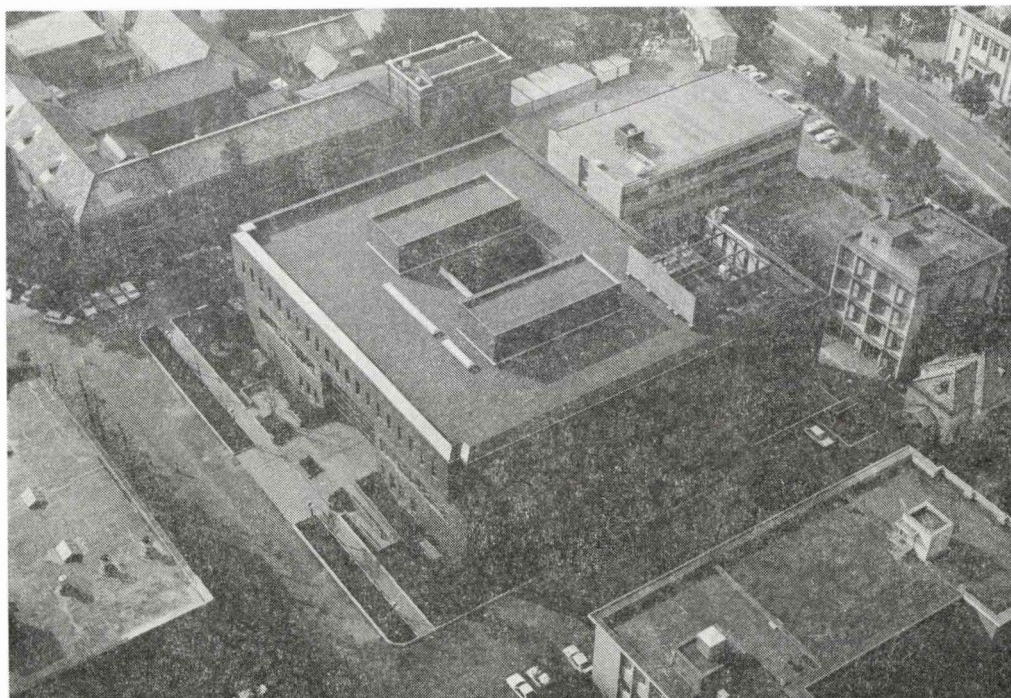
##### 1. 保存書庫（バックナンバーセンター）の設置

新館における書庫スペースは、全体で約105万冊をこえる収蔵が可能である。このうち約40万冊分のスペースについては、全学的な雑誌のバックナンバーセンターとし、研究図書館機能の充実を期している（このことについては、附属図書館報『静脩』号外「京都大学バックナンバーセンターの設置計画について」1983年10月参照）。

##### 2. 貴重図書の保存

貴重図書の保存については、貴重書庫に恒温・恒湿・防火の設備を完備し、全学的見地に立った貴重図書の保管計画をたて、中央館の所蔵する貴重図書のほか、部局の要望に応じて、その貴重図書を所蔵する。

（附属図書館）



新 図 書 館 全 景



## 新 図 書 館 概 要

## 1. 所 在 地

京都市左京区吉田本町

## 2. 面 積

建築面積	2,477.86 <sup>m<sup>2</sup></sup>
延床面積	14,011.25 <sup>m<sup>2</sup></sup>
地下2階	2,353.21 <sup>m<sup>2</sup></sup>
〳 1階	2,353.21 <sup>m<sup>2</sup></sup>
地上1階	2,319.29 <sup>m<sup>2</sup></sup>
〳 2階	2,168.70 <sup>m<sup>2</sup></sup>
〳 3階	2,297.98 <sup>m<sup>2</sup></sup>
〳 4階	2,262.09 <sup>m<sup>2</sup></sup>
塔屋階	256.77 <sup>m<sup>2</sup></sup>

## 3. 構 造

鉄骨鉄筋コンクリート造り (S.R.C)

地上4階 地下2階 塔屋1階

## 4. 蔵書能力

地下1階書庫	約 250,000冊
貴重書庫	約 50,000冊
地下2階書庫	約 750,000冊

(うち約40万冊分は「京都大学バックナンバーセンター」計画により全学のバックナンバーを収納する。)

開架書架収納可能冊数 約100,000冊  
 (うち2階開架閲覧室 7万冊)  
 計 約1,150,000冊

## 5. 閲覧座席数

## 1 階

自由閲覧室 }  
 参考図書室 } 約 210席  
 雑誌閲覧室 }  
 貴重図書閲覧室 約 6席

## 2 階

開架閲覧室 約 600席

## 3 階

研究個室 13室  
 共同研究室 約40席 (20席×2室)  
 AVブース 18ブース  
 特殊資料室 12席 (マイクロリーダー席を含む)

対面朗読室 2室

(AVホール 118席)

## 6. 開館時間

平日 午前9時～午後9時

土曜日 午前9時～午後5時

ただし、1月6日～1月10日、7月  
 21日～8月4日

8月16日～9月10日の各期間は

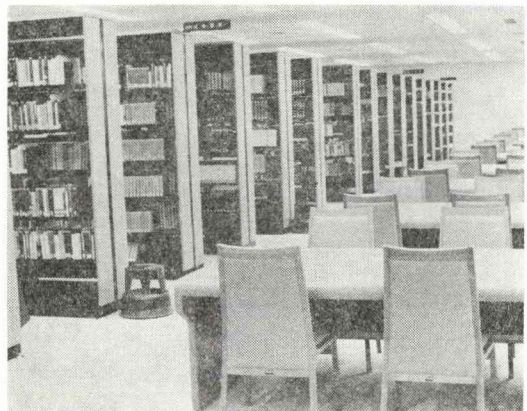
平日 午前9時～午後5時

土曜日 午前9時～午後5時

## 7. 休館日

日曜日、国民の祝日、本学創立記念日 (6月  
 18日)、4月1日～4月5日、8月5日～8  
 月15日、12月25日～翌年1月5日 毎月末日  
 (末日が日曜日にあたる場合は、その前日)

## 8. 事務組織



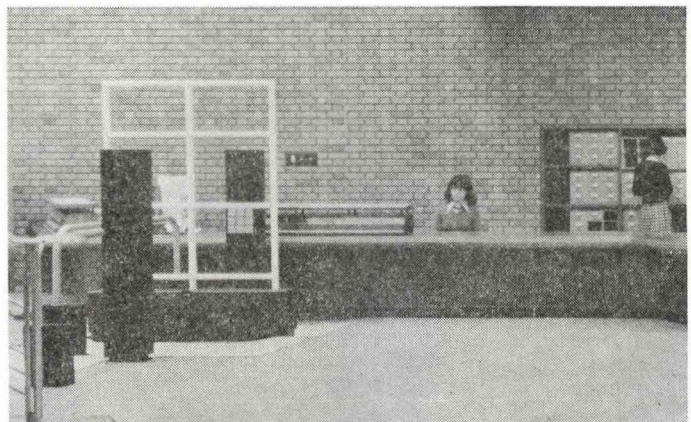
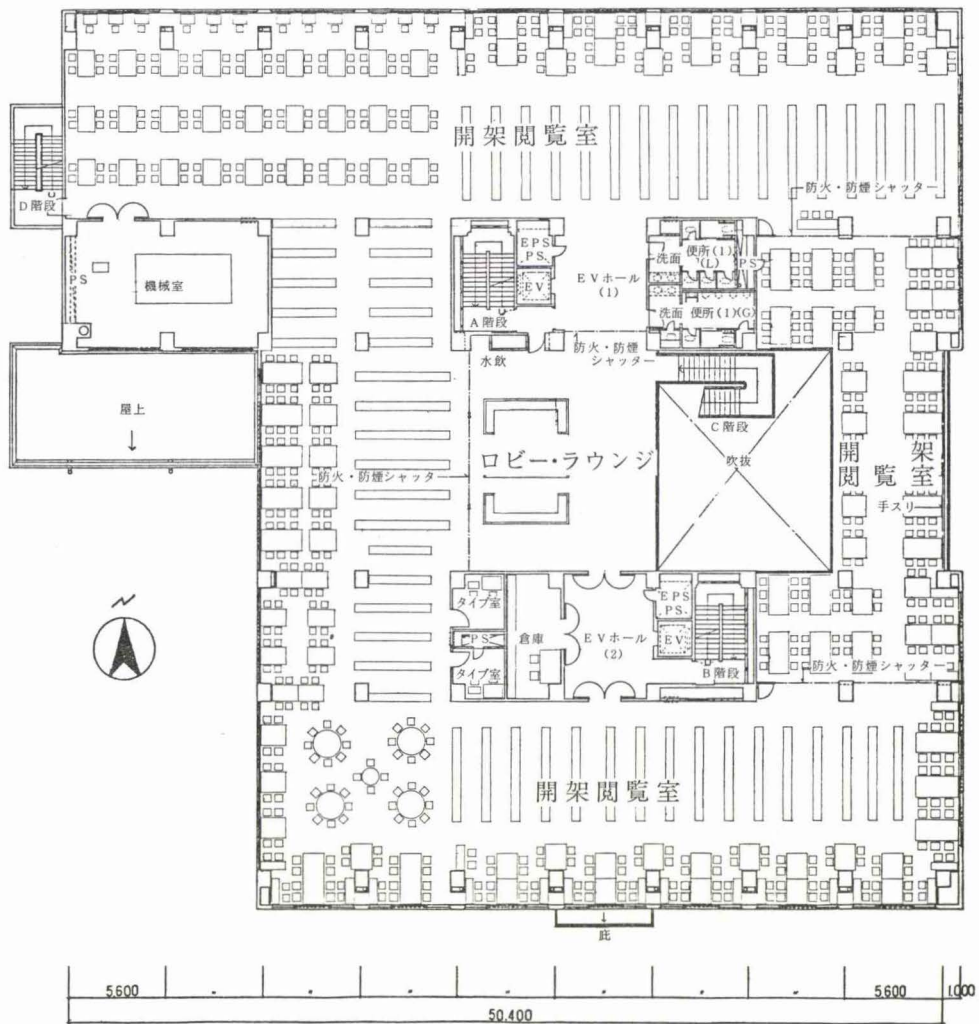
開架閲覧室 (2階)

## 1 階平面図



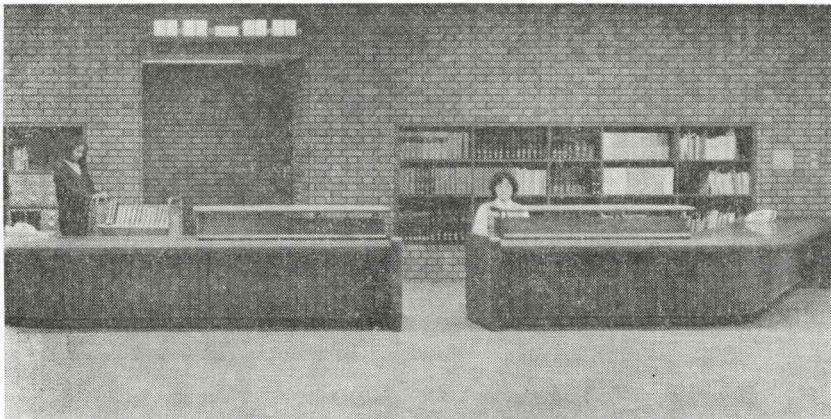
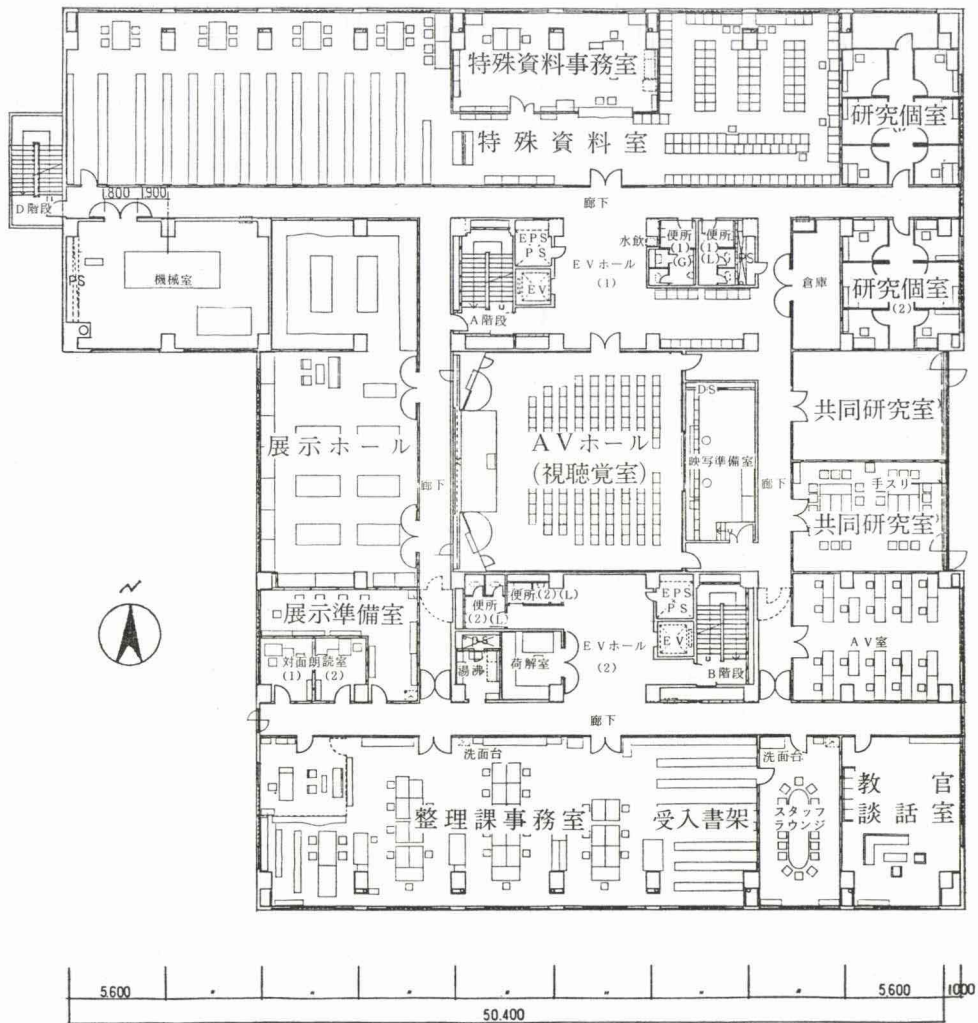


2 階平面図



メインカウンター 1階 左 (案内, 貸出・返却)

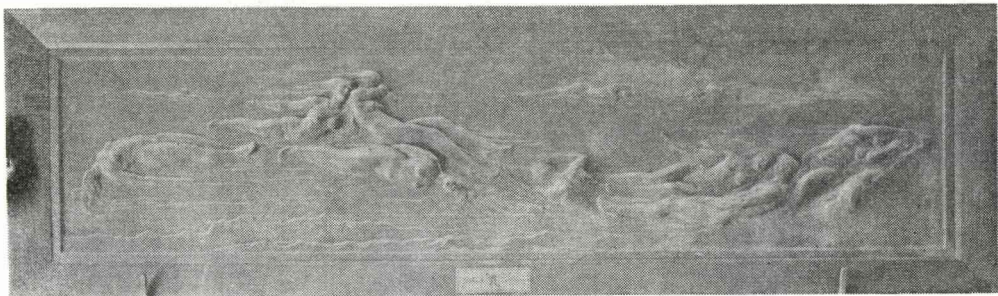
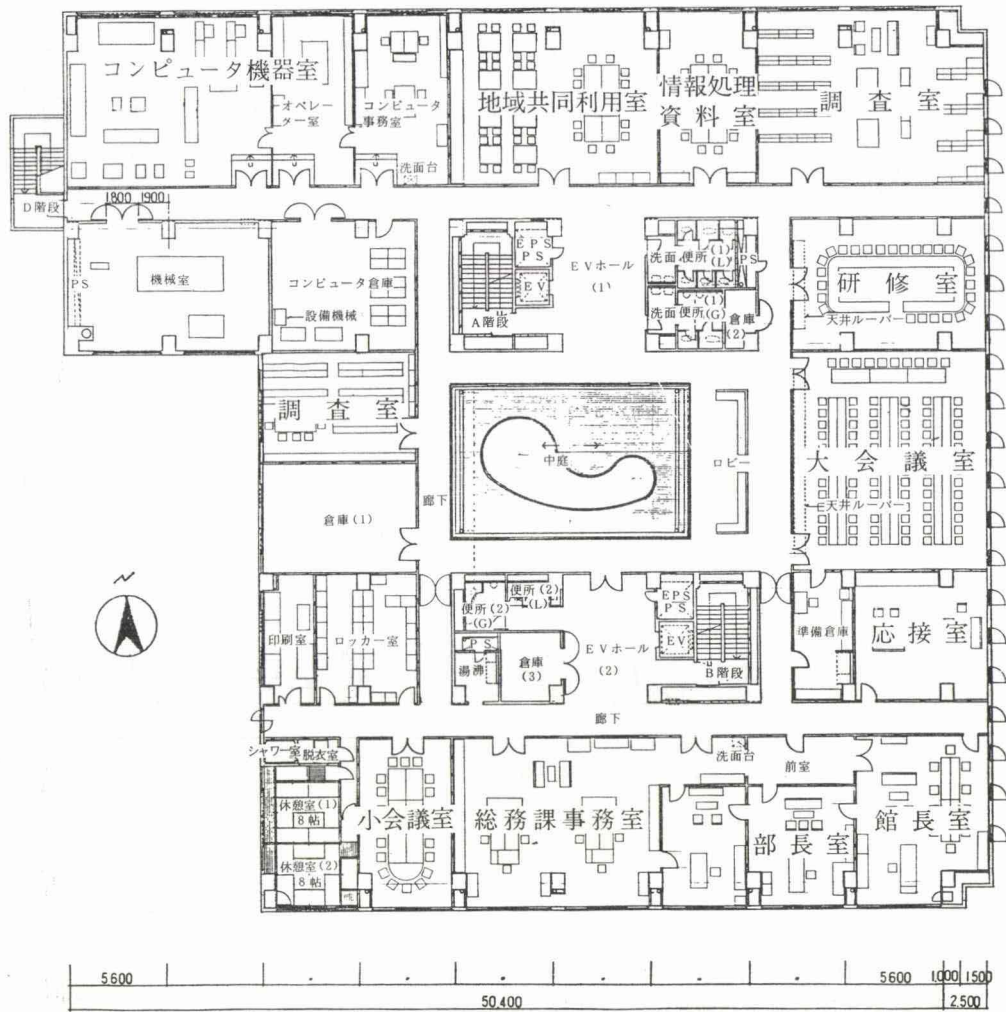
3 階平面図



メインカウンター 1 階 右 (書庫内図書の利用, 相互協力, 参考)



4 階平面図



「雲」1 階正面奥 参考図書室 (斎藤素敵作 大正13年)